

子供の自重心(二)

倉橋惣三

如何にして子供の自重心を養つてゆくかといふには、消極極二面の考察がある。

(甲) 吾々の日常子供に對して爲して居ることの中で、子供の自重心の發達を害して居る様なことはあるまいか。夫れには二つの大に注意すべきことがあると思ふ。過度の甘やかしと、過度の嚴格との二つである。此二つは全く南と北との様に兩極の違ひの様であるが、子供の自重心の發達を害するといふ點に於ては、其軌を一つにして居る。即ち共に子供の生活を餘りに自己以外の力にたよらしめる。甘やかしは勿論のこと、嚴格といふのが多くは綿密な干渉になつて、自ら考て、自ら行ふといふ氣力も習慣も子供になくなる。ぐつと根性の強い子供ならば、其干渉に反抗して意地曲りになることもあるが、それとて眞の正しき自重心と

二八
はいはれない。況んや大低の子供は周囲の干渉に負けて仕舞つて、無氣力者になる。之れは共に大に吾々の注意すべきことである。

(二) 次に自重心を養つてゆく方法としては

第一、子供の身體の健康、殊に神経系統の健康といふことが極く大切である。勿論、胃が悪い、齒が痛いとて自重心が減る譯のものではないが、心の力は屢々體の力に支配されることがある。少くも大に關係がある。且又健康上の缺點は、自重心をも病的ならしめる恐れがある。

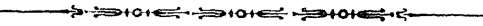
第二、子供は子供相應に權利を認めてやらなければならん。其分限内に於て、適當な位置と主張とを持たしてやる様に、周圍から供へてやらねばならん。從順も極く大切である。併し、正當な自己主張の氣力も極く大切である。幼時から一度も人に尊敬されたことのない。即ち自己を他から認められたことのない子供——貧兒孤兒などに往々ある——にどうしても、眞の自重心の養ひ難いの

は、其方面の教育に經驗ある人の屢々漏す嘆聲である。植物の伸々した、活々した發達には何より日光が大切である。子供の伸々した、活々した發達に必要な日光は、明く、温く、周圍から遇さるゝことである。暗い冷い地下室の様な、頭の上げよらない境遇に置かれては、子供の心は屈せざらん、萎えざらんとするも得ずである。

第三、子供に時々得意の感じを經驗させることも必要である。勿論、それが過ぎては、手のつけられぬ生意氣もの、傲慢者を作る恐れがある、之れは大に警戒しなければならんが、人間は總て、自己の成功に於て自己の力を信するに至るものである。いくら自重自信の強い人でも、餘りに常に失敗がついき、不得意のみであると、つい自信も鈍り易く、自重も折れ易い。子供に於て殊にそうである。子供同志相撲でもとらせば、始終必ず負ける子供は負けて、平氣になつて仕舞ふ。勝うといふ氣力も出ねば、自分で自分を弱いものとして仕

舞ふ。そこで、そういふ子供を引立たせてやるには、時には一層弱い子と取組まして、勝たせることも必要であらう、但し先生自身が故意とうそに負けてやるといふ仕方はよろしくない。他のことも同じである。手技にしても、遊戯にしても、始終組中で一番下手と、周圍からよりも却つて自分で相場づけをして仕舞はせる様なるは親切な保育ではない。そこに懇切な仕向けをして「我れと雖も」といふ感じを次第々々に持つ様にしてやらなければならん。殘に氣の弱い子に對しては一層此の必要がある。總て意志力の發達は、計畫して、實行して、成遂する處に満足もあり、發達もある。それを、いつも計畫して、實行して、不成遂といふのでは、成人ならでまだしも、子供にはつゝ氣が衰へるのである。成遂の満足、即ち自力成功の愉快といふことは子供に必ず經驗させ度いことである。

第四、併し小さい子供などでは、斯ういふ真正



面の自己經驗のみから自尊心を發達させるといふことは、多少困難な場合がある。そこで、周圍から自重を促す方法も必要になる。即ち子供を、より大いなる自重の一部として、そこから勵ましてゆくのである。あなたは何々幼稚園の幼児ではありませんか。あなたは日本の子供ではありませんかといった類である。自分で自分の價値を認めるといふ迄に至り得ない子供でも、自ら尊いと思ふものゝ一部であるといふことは、少からず自重を促すのである。昔の武士の家で、子供が下品なことでもすると、子供として、そなたは武士の子ではないかと言つて自重させた類が即ち之である。乳母政岡が、いたいけな幼主と我子とを強く育てたのは一つに此の方法によつた。

第五、併し、子供の自重信養成に何より大切な又最も有効なことは、「自分は愛せられて居る」といふ感じである。親にせよ、先生にせよ、自分を決して棄て、居ない。自分を愛して居て呉れると

思ふ時に、自ら已れを重んぜざるを得ぬ感じが、子供心にも起る。之れが一番健全な自尊心である。彼の不良兒とか、少年犯罪とか、いろ／＼憐れな子供達は、その境遇柄とはいへ、つまり誰れからも愛せられなかつたものが多い。怒も起る。邪念も起る。怠け心も起る。併し、我れを愛して居て下さる人々の爲に、自ら已れを擧める様のことには出來ない。斯う思ふては子供心に正しい方に歸るのである。信せられて自ら信じ、愛せられて自ら愛し、重んぜられて自ら自んずるは人の心の常則である。是に於てこそ、實に謙遜なる自尊心が養はれる。我々子供に接するものは、我々の愛心の故を以て子供が自づと自ら正しい方へ勵まされる迄に、愛を籠めたいものであると思ふ。斯くて子供の眞に正しい自尊心は方法や、言葉や、取扱ひ方だけで養はれるものではなかつた。吾々の愛心にこそよるのであつた。